

江英彦君との思い出

江君は中国化学会において赫々たる業績を上げた学者を「君づけ」するのはいささか差しさわりのあるかも知れないが、大学時代のクラスメートとしてお許しを願いたいと思います。

さて、私の手許には2006年に彼から贈与を受けた「江英彦先生八十歳」の記念誌がある。彼のそれまでの業績をまとめたもので、我がクラスの至宝として私が預かっています。彼の波乱に充ちた生涯の中でこれだけの偉業を成就された江君には頭が下がる思いです。

江君と私の出会いは1950年4月、大阪大学工学部応用化学科に入学した時でした。戦後日本の学制が変わりましたが、我々は旧制の最後のクラスで総員47名、入学から卒業まで3年間一人の落伍者もなく卒業したのは幸いでした。

江君は当時から身体も大きく、悠々せまらぬ大人の風格を持っていました。卒業論文の研究は渡瀬研究室(後の大河原研究室)だったと思います。

我々のクラスは、竹本喜一君、松田治和君という二人の阪大教授を出し、また柴山恭一君(三菱電機)という高分子学会の要職にあった者もあり、江君にとっても、日本の学界との絆を深めるには好都合ではなかったかと思っています。

しかしながら、日本にいた三人の学者は割合早く他界したのは残念でしたが、江君にとっても心残りだったと思います。

私は卒業以来関西にずっと居住した関係で、生涯を通じてクラスの世話役を承りました。その関係で江君とはよくお会いする機会がありました。

また、節目節目にはクラス会を催しましたが、江君がクラス会に参加してくれたのは2008年(卒業55周年)の一回のみだったと記憶しています。

55周年のクラス会は近江八幡の民宿で開き、翌日彦根城を見学しました。この時は私が企画したのですが、当日病のため私自身出席できず、田中義一君に世話役をおまかせしたのです。

そして、記念すべき六十周年は母校のキャンパス見学を行うこととし、昨年(2013年)10月に開催したのですが、その直前の3月に江君の訃報が届きました。誠に残念の極みでした。

最近、すでに鬼籍に入った友達の懐かしい顔を思い出すことが多いのですが、その中でも、あの江君の温顔を思い出すことしきりです。

メック株式会社

相談役 前田耕作

別便にて、2008年55回卒業記念に彦根城を見学したときの写真を送ります。後列左端に彼の温顔を見ることができます。